

『赤と黒』の構造 (二)

吉 田 廣

* 本稿は「大阪経済法科大学論集」第101号の pp.1-38の続きである。

目 次	(ゴチック箇所が今回分)
はじめに	
第1章	時間構成
第2章	話法
第3章	空間構成
第4章	視点
第5章	語り手と登場人物
第6章	レトリック
第7章	文章構造
第8章	ふたたび時間構成
第9章	ふたたび話法
第10章	ふたたび空間構成
第11章	ふたたび視点
第12章	ふたたび語り手と登場人物
第13章	ふたたびレトリック
第14章	ふたたび文章構造
おわりに	

第4章 視点

● 前章からの梗概

過度の自尊心からくる、「経験を積んだ男の役割」を演じようとする思いを、まもなく捨て去ったジュリヤンは、若者らしい情熱を傾注してレーナル夫人との恋に夢中になる。レーナル夫人もひたすらジュリヤンを愛し続け、9月8日、ある国王がヴェリエールを通過した際には、ヴェリエール町長夫人の立場を巧みに利用してジュリヤ

ンを警護隊員に抜擢させ、その若々しい馬上の勇姿に見惚れる。だが、その後ふたたびヴェルギーに帰って数日後に、末子のスタニスラスが熱病に罹る。まもなくその病状が悪化すると、レーナル夫人は、スタニスラスが死ぬようなことがあれば、それは自分の不倫に対する天罰なのだと強く思い込むようになる。下掲のテキストは、スタニスラスが重態から少しずつ回復してきた頃のジュリヤンとレーナル夫人の恋愛心理を主に描いている。

● テキスト（上巻175頁6行目～178頁4行目）

ついに神はこの不幸な母親を憐んだ。スタニスラスはすこしずつ危険状態を脱した。しかし、足下の薄氷は割れてしまった。彼女の理性は自分の罪業の深さを知ったが、もはや心の平静を取り戻すことはできなかった。悔恨が残った。その悔恨は、このような真心そのものの女性の場合に、当然とるべき姿をとった。その生活は天国と地獄になった。ジュリヤンの姿を目にしないときは地獄であり、ジュリヤンの足下にあるときは天国だった。恋の陶酔に思いきりひたりきったときでさえ、レーナル夫人はジュリヤンにいうのだった。「あたしはもう甘い考えなどもっていないわ。天罰を受けたの。もう取返しのつかない天罰だわ。あなたは若いし、あたしの誘惑に負けただけですもの、神さまも許してくださるでしょうが、あたしのほうは地獄落ちだわ。はっきりしたしるしがあるからわかるの。あたし、こわいわ。地獄を目にしてこわがらないひとがあるかしら？ でも、ほんとには後悔なんかしてないの。犯せといわれれば、もう一度だってこの罪を犯すわ。でも、あたしが生きているうちから、子供を通じて天罰が下るようなことがなければ、それだけでも、あたしにはありがたすぎるくらいだわ」そうかと思うと、また別のときには「でも、あなただけは、あたしのかわいいジュリヤンだけは幸福でしょうね？ あたし、愛しかたが足りなくはない？」などと、叫ぶこともあった。

とりわけ犠牲的な愛を求めるジュリヤンではあったが、その猜疑心も自尊心の悩みも、これほど大きな、まったく疑う余地のない犠牲を、

たえず見せつけられては、くずれないではなかった。彼はレーナル夫人を心から愛するようになった。《この女は貴族だし、おれは職人のせがれだが、それはどうでもいい。この女はおれに恋してるんだから。……おれはこの女を相手に、恋人の役目をやらされる召使とはわけが 25
ちがう》こうした不安がなくなると、ジュリヤンは恋に狂い、まったくの忘我の世界にひたるようになった。

自分の恋を疑うようなそぶりを、ジュリヤンが見せると、彼女は叫ぶのだった。

「ふたりだけで過せるのもわずかな月日のことだわ。せめてそのあい 30
だだけでも、あなたをほんとうに幸福にしてあげたい。せかれる思いだわ。あたしはもう、あなたのものでなくなるかもしれないのですもの。あたしの身がわりに、天罰が子供たちの上に下されたりしたら、いくらあなたを愛するために生きるのだと思ってもだめだわ。あたしのせいで子供が死んだのだということは、どうしても忘れられないで 35
しょうから。そんな打撃を受けたら、とても生きてはいかれないわ。生きようと思っても、だめですわ。気が狂ってしまいますもの」

「あなたはスタニスラスの熱病を引き受けたいといってくださいったわね、そのお気持はほんとにありがたいわ。あたしだって、どんなにあなたの罪まで引き受けたいかしのよ！」 40

この大きな心の急変が、ジュリヤンと恋人を結びつけている感情の性質を一変した。その恋はもはや単に美貌を讃美する気持や、これをわがものとする誇りだけではなくなった。

ふたりの幸福は、それ以来今までとは比べものにならないほど高まり、身を焼く恋の炎はいよいよはげしくなった。ふたりは気も狂うばかりの陶酔を味わうのだった。ふたりの幸福は、はたのものには、い 45
っそう大きくなったと思えたにちがいない。だが、レーナル夫人は、ジュリヤンからそれほど愛されていないのではないかということだけを心配していた、なれそめのころの、甘美な明朗さ、曇りのない無上の喜び、たわいない幸福は、もはや味わうことができなかった。ふた 50

りの幸福は、ややもすると、罪の姿をとるようになった。

いかにも幸福で、一見いかにも穏やかそうなときでさえ、レーナル夫人は、急に痙攣的にジュリヤンの手を握りしめながら、叫び出すことがあった、「まあ！　こわい！　地獄が見える。たまらない責苦だわ！　仕方がないわ、それだけのことをしたんですもの」彼女は壁に 55
からむ鳶のように、男にしがみついて、抱きしめるのだった。

ジュリヤンは女のおびえる心を鎮めようとするが、どうにもならない。女はジュリヤンの手を取ってはキスを浴びせる。そして、再び暗い夢にひたるのだ。《地獄だってあたしには救いだわ。まだこの世であのひとと幾日かは一緒に過せる。でも、子供を取られたら、生き地 60
獄だわ。……でも、それだけ犠牲をはらえば、あたしの罪は許されるかもしれない。……ああ！　神さま！　そんな犠牲をはらうくらいなら、あたしをお許しくださらなくてもいいのです。あのかわいい子供たちはあなたに背いたことなどありません。あたしだけが、ほんとに
あたしだけが悪いのでございます。夫でもない男に恋しているのです 65
から》

そうかと思うと、レーナル夫人が落着きを取り戻したように見えるときもあった。そういうときは、愛するものの生活をわが身の責任と考え、これを毒してはならないと思うのだった。

I 『読み解く』第4章の概念装置

『読み解く』とは、筆者が2008年10月に大阪経済法科大学出版部から上梓した『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』の略記である。まずその第4章の要約から始めよう。

小説文のなかに現れる事象は、常に誰かによって眺められている。多くの場合、それを眺めるのは登場人物の誰かである。また、その視点は、即物的かつ解釈的である。

即物的視点は、対象を感覚的に受け止める立場のことをいう。解釈的視点は、

対象の意味内容を推し測る立場のことをいう。たとえば、「夫は彼女の胴をしっかと抱きしめた」という出来事は、被行為者である「彼女」によって、即物的にも解釈的にも受け止められている。即物的意味は歴然としている。解釈の意味としては、「私という存在は夫によって支配された」と「彼女」が思っていることが挙げられる。

この即物的視点と解釈の視点は、ともに被行為者のものである限りにおいては、外在的な視点である。しかし、この同じ出来事は、行為者自身によっても眺められている。すなわち、行為者の側には、抱擁者の触覚をもって出来事を受け止める視点と、「新妻の肉体をやっと手中に収めた」と解釈する視点とが存在する。この場合の視点は、行為者自らが自分の行為を眺めているので、内在的だと言える。

以上と同様なことは、行為のみならず、発話や心理についても言える。所与の発話について、被発話者は聴覚的かつ解釈的にそれを受け止める。聴覚的にその発話の調子や内容を受け止め、それと同時にその調子と内容の因って来たる所以を解釈する。これらが被発話者の外在的視点の中身である。一方、発話者は、ある目的のために話している自分自身を見出す。その目的の達成のために、意識的か無意識的かの度合は場面によってさまざまだが、発話の際の口調を工夫し、発話に盛り込むべき内容を紡ぎ出している。こちらは内在的視点である。

心理についても同断である。「いらだたしさ」などの心理は、内在的には、その原因と程度を、即物的にも解釈的にも主体が遣り切れないものとして受け止める。一方で、客体もその原因に思いを巡らせたり、その程度を推し測ったりするし、体内に一種の違和感や緊張感を覚えもする。主体が身近にいれば、客体は主体と即物的接触を保てるが、手紙やメールによる通信の場合には、文面や字面に頼る以外に手立てはない。もともと、相手の心理を正しく把握するために、いずれの場合が好都合なのかはにわかには定め難い。

けれども、所与の登場人物の心理描写は、外在的視点を常に伴うわけではない。たとえば自由間接話法において展開される物思いでは、内在的視点が露にされる。原則として、そこには外在的視点が存在しない。目の前に他の登場人

物がある場合であっても、主体が一方的に物思いに耽っていれば、彼我の関係は絶たれている。

ところで、語り手は、ほとんど常に登場人物の視点に寄り添っている。そして、それは読者による追体験の基礎になる。それでも、時として語り手が自らの視点を前面に押し出すこともある。純粹に客観的な空間描写がなされる場合がそうだし、語り手自身の人生観が述べられる場合もそうである。また、いろんな登場人物に対して、語り手がどれだけの距離を保つかも一様ではない。つまり、所与の登場人物に語り手がどれだけ擦り寄るかには程度の差がある。この点は、映画の登場人物と観客との関係を思い起こせば、至極わかりやすいだろう。

われわれ読者のほうは、語り手の視点に常に寄り添っている。語り手の視点が登場人物たちのそれと一体になるときは、われわれも登場人物たちの立場になって、彼らの言動や心理を追体験する。語り手が所与の登場人物に距離を取れば、われわれとその人物のあいだも疎遠になる。

けれども、語り手の視点と読者の視点のあいだには質的な相違がある。語り手はストーリーを知悉している。当然のことながら、読者にあつては事態が明らかにそれと異なる。もし同じであったなら、読書という行為そのものが根本から成立しなくなる。

もっとも、登場人物の視点と比べれば、読者の視点はより大局的である。けだし、われわれが登場人物の言動や心理に対して高みの見物を決め込むことができるのは、小説文の大きな魅力の一つである。つまり、われわれは、小説のストーリー展開の意外性に圧倒される一方で、個々の登場人物に対してはある種の優越感を抱くことができる。

これは三人称体小説にのみ当てはまることではない。『坊っちゃん』のような一人称体小説にも当てはまる。一人称体小説では、語り手自身が登場人物として文章中に出てくるが、その場合の語り手は登場人物群の内の一人にすぎない。一方、ナレーターとしての語り手はストーリー展開を知悉している。つまり、一人称体小説と三人称体小説のいずれであっても、ナレーターとしての語り手の有り様は同じである。

II テクストの分析

本断章は、子供への愛情とジュリヤンへの恋慕のあいだで、心が激しく揺れ動くレーナル夫人の心理や言動を審らかに語っている。その限りでは、視点の主体はほとんど常にレーナル夫人である。

レーナル夫人のジレンマは随所で喚起されている。例えば、12～14行目の「あたし、こわいわ。地獄を目にしてこわがらないひとがあるかしら? でも、ほんとには後悔なんかしてないの。犯せといわれれば、もう一度だってこの罪を犯すわ」では、天罰を畏れるレーナル夫人の言葉の直後に、ジュリヤンとの愛情関係をいかに彼女が大事に思っているかが、対照的に述べられている。

神を畏れる宗教的本能と、ジュリヤンとの不倫を無上の喜びだと思ふ現世的愛欲とのあいだで、夫人の心が激しく揺れる模様は、59行目からの内的独白においてより鮮明に窺い知ることができる。

《地獄だってあたしには救いだわ。まだこの世であのひとと幾日かは一緒に過せる。でも、子供を取られたら、生き地獄だわ。……でも、それだけ犠牲をはらえば、あたしの罪は許されるかもしれない。……ああ! 神さま! そんな犠牲をはらうくらいなら、あたしをお許しくださなくてもいいのです。あのかわいい子供たちはあなたに背いたことなどありません。あたしだけが、ほんとにあたしだけが悪いのでございます。夫でもない男に恋しているのですから》

見られるように、話法形態の相違を超えて、レーナル夫人が陥っているジレンマが、ここのテキストでは詳細に描き出されている。両立し得ない2つの事柄の一方を取り上げては、そのあとすぐに他方の事柄に眼を向けるという夫人の狂おしい心の動きが、本断章において連綿と綴られている。同一人物の内面に巢食う2つの存在が互いに相手を攻撃している恰好だ。相対立する2つの視点が激突し合っている。

その限りでは、上掲の2つの言説、さらには、それらに類する言説の発話者であるレーナル夫人は、被発話者としてのジュリヤンがそこに一緒にいることを絶対的前提条件としていない。ただ、彼らの恋の1つのクライマックスをこ

ここで築くために、本断章を通して常に2人が一緒にいるという設定を語り手は採っている。

いずれにしろ、レーナル夫人のジレンマが微に入り細を穿って喚起されているので、ジュリヤンや読者の視点は、解釈的性質を帯びる余地がほとんど無い。それほどまでに、レーナル夫人の心状が赤裸々に表現されている。

もっとも、上掲の2番目の引用箇所は、ジュリヤンが耳にしえない内的独白である。そこには読者が喫驚するような件が含まれている。それは、「でも、それだけ犠牲をはらえば、あたしの罪は許されるかもしれない」という、レーナル夫人の心中の暗黒面を言い表す部分である。この部分はすぐに内面の別の声によって否定されるのだが、われわれ読者は、そこにおいて表現されている夫人のジレンマの深甚さに圧倒される。

一方のジュリヤンは、夫人の言動を眺め、彼女の心理を探る立場にある。偽善を貫いて出世することを自らに課しているジュリヤンは、また、並外れた猜疑心の持ち主である。だから、自分の感情を容易には表に出さない。そのために、レーナル夫人も「でも、あなただけは、あたしのかわいいジュリヤンだけは幸福でしょうね？」（17～18行目）とジュリヤンに尋ねるほどである。

しかし、厳しいジレンマの底で悶える夫人の姿を目にして、誇り高いジュリヤンも、夫人の真心をもはや疑い切れなくなる。その間の事情は、20行目からの1段落において明らかである。

とりわけ犠牲的な愛を求めるジュリヤンではあったが、その猜疑心も自尊心の悩みも、これほど大きな、まったく疑う余地のない犠牲を、たえず見せつけられては、くずれないではなかった。彼はレーナル夫人を心から愛するようになった。《この女は貴族だし、おれは職人のせがれだが、それはどうでもいい。この女はおれに恋してるんだから。……おれはこの女を相手に、恋人の役目をやらされる召使とはわけがちがう》こうした不安がなくなると、ジュリヤンは恋に狂い、まったくの忘我の世界にひたるようになった。

この引用箇所の末尾に「忘我」という言葉が出てくる。我を忘れる——つまり、客体に対する主体の視点が減却する。これは、レーナル夫人についても同

じことである。「恋に狂う」という局面に2人はいる。このような状況では、そもそも視点というファクター自体が薄れて無くなってしまう。2人の存在が、それぞれ固有の視点を持ち得ないほどの調和にまで融合する。

*

小説を読むとき、われわれは語り手の存在に特段の注意を払わない。その理由の最たるものとして、読者は何よりもストーリー展開に注目していることが挙げられる。読者はその最大の関心事に惹かれて、ひたすらページをめくっていく。

それに対して、本稿で試みられているのは断章凝視である。必然的に読みのテンポは遅くなる。その代わりに、通常ならば見えないことも見えてくる。例えば、語り手がいかなるタイプの人物なのかがわかる。

テキストの冒頭には「ついに神はこの不幸な母親を憐んだ。スタニスラスはすこしずつ危険状態を脱した」とある。ここからは、語り手が無神論者でないことがわかる。もっとも、レーナル夫人とジュリヤンの不倫関係を事細かに述べ立ててもある。その筆致からは、信仰の道を逸れた恋であっても、それを許そうという姿勢が窺える。また、レーナル夫人の信仰心は、これからあとのストーリー展開にとって重要なモーメントとなっていく。

こうしたことは『赤と黒』の語り手に限って言えることだが、より一般的に小説文の語り手に思いを巡らすとき、少なくとも2つの点が指摘されねばならない。

一つは、語り手が全ての登場人物の心理や事情を知悉していることである。その次第は、地の文からも直接話法からも窺えるし、また、内的独白にも表れる。ここの断章では、語り手は、主にレーナル夫人の内面に忍び込んだり、その言葉や独白に擦り寄ったりしている。そして、読者もこうした語り手の視点に同調する。考えてみれば、こうした経験ができるのは小説文ならではのことであって、日常生活においては適わないことである。小説を読むとき、われわれは日常の瑣事を逃れて、暫しエキゾチックな想像の世界に自らを解き放つ。

もう一つは、語り手が途方もなく弁舌爽やかだということである。それを記

述者と言ひ換えても、その人物は並外れて有能な執筆家である。『赤と黒』上巻に限っても、350ページほどにわたる言説を、口や手から些かの淀みもなく紡ぎ出すのは、まさしく神業に等しい。だから、小説の語り手や記述者は、あくまで理念的な存在だと見なされねばならない。フランス語に「本のように話す」という成句があるが、小説に限らず全ての書物は、淀みの無さを特徴として有している。われわれ読者（あるいは聞き手）は書物の文章の滑らかな流れに身を任せて、ひとときのあいだ日頃の雑念を忘れ去る。

＊

われわれは、ストーリーの全体も細部も知悉している語り手に随従する。それは、いろんな驚きを喫したいからである。語り手も、惜しげなく驚きの種を撒き散らしていく。そうしなければ、自らの存在理由が無くなってしまふからである。語り手の存在と読み手の存在は、小説の想像的世界を具現化させるために、欠けてはならない2つの重要な要素だと言えよう。

語り手が言説のなかに仕掛ける驚きの種として最も代表的なのは、対照もしくは対比である。対照が2つの事象について言われるのに対して、対比はそれらを並べ比べる行為について言われる。例として44～51行目の1段落を取り上げてみよう。

ふたりの幸福は、それ以来今までとは比べものにならないほど高まり、身を焼く恋の炎はいよいよはげしくなった。ふたりは気も狂うばかりの陶醉を味わうのだった。ふたりの幸福は、はたのものには、いっそう大きくなったと思えたにちがいない。だが、レーナル夫人は、ジュリヤンからそれほど愛されていないのではないかということだけを心配していた、なれそめのころの、甘美な明朗さ、曇りのない無上の喜び、たわいない幸福は、もはや味わうことができなかった。ふたりの幸福は、ややもすると、罪の姿をとるようになった。

ここには、いまの「身を焼く恋の炎」と「なれそめのころの、甘美な明朗さ、曇りのない無上の喜び」とが対照的に並べ置かれている。特にレーナル夫人の側にあつて、罪の意識に戦く現在と罪の観念が胸に無かった過去とが対比されている。

もっとも、この対照は、レーナル夫人の場合もジュリヤンの場合も、厳密には全きものではない。この段落にあるように、過去において、レーナル夫人は「ジュリヤンからそれほど愛されていないのではないか」という「心配」も抱いていたのだし、ジュリヤンのほうはある「不安」(26行目)の虜になっていた。すなわち、自分が「恋人の役目をやらされる召使」(25行目)なのではないかとの疑念である。「曇りのない無上の喜び」の最中にあっても、猜疑心の強いジュリヤンは、そのような不安を胸に抱いていた。

これは、われわれがこれまで知り得なかったことである。だから、そのような不安が彼の脳裡を去らなかったと知るとき、読者は大きな驚きを感じる。読者は、2人が純粋な愛の絆で結ばれていると思い込むように仕向けられていた。完全な愛の絆で2人が結ばれるのは、彼らの愛情関係が「罪の姿をとるようになって」(51行目)はじめてだったとは、皮肉な運命であり、われわれ読者にとって小さからぬ驚きである。

小説を読みながら、われわれはさまざまな「喜怒哀楽」を登場人物たちと共有する。それらの感情に通底しているのは「驚き」である。登場人物たちに感情移入できなければなす術はないが、それができれば、驚きに満ちた彼らの生活や人生を、読者は我がことのように追体験する。

Ⅲ まとめ

本テキストを分析するまでは、主体と客体のあいだで感覚的視点と解釈的視点とが常に働いているものだと考えていた。もちろん、客体が睡眠状態にあるときは自ずと話が異なる。しかし、その場合でも、眠りに陥っている客体を眺めながら主体はいろんな思いを巡らせる。

いずれにしても、『読み解く』第4章を執筆しているときには、我を忘れるほど2者が融合するという状況にまで思いが至らなかった。それに対して、主客が完全なまでに融合する場面を扱っているのが、本断章に他ならない。

新たな素材を取り上げて分析することの効用は、まさしくこういう点にあるのだろう。また、『読み解く』第4章で『女の一生』のなかの一言説を分析の

組上に載せた経験が無かったら、そうした事柄に気づいたかは疑問である。2つの言説がともに男女間の場面を描いていながら、『女の一生』の言説が2人の関係の齟齬を際立たせていたのに対して、『赤と黒』の本断章は、2人のあいだの絶対的調和を強調している。その対照に気づくことができたのは、われわれにとって大きな収穫である。

これとは逆に、語り手の存在理由については、本章で再確認することができた。とりわけ、語り手はあくまで理念的な存在であるが、その存在をどれほど読者が必要としているかについての考察を深めることができた。おそらく世の全ての名作において、語り手は名ナレーターなのだろう。だから、読者は淀み無いストーリー展開に身を任せるのだし、特段の注意を払わなければ、語り手の存在すらも気に掛けることはない。名役者の演技を見ている最中に、観客がその役者の私生活に思いを巡らせはしないのと、事情はよく似ている。

また、小説を読むことは、数かずの驚きに遭遇することである。スリルやサスペンスを経験することである。「足下の薄氷は割れてしまった」（2行目）と語り手が宣告するときに、読者は2人の恋仲がどうなるのかと疑問に思う。一種のサスペンス状態に読者は置かれるわけだが、残りの紙幅のほとんど全てがその疑問に対する応えとなっている。罪の意識があるからこそ燃え盛る恋の炎に身を焦がす、2人の姿が詳しく描き出されている。小説は、異様な光を放つことで読者の想像を掻き立てる言説である。

第5章 語り手と登場人物

● 前章からの梗概

冬の到来とともにレーナル一家とジュリヤンは、ヴェルジーからヴェリエールに帰ってくる。ところが、暫く前からヴェリエールでは、ジュリヤンが年俸600フランのままでレーナル家に居残るか、年俸800フランを申し出た貧民収容所長ヴァルノ氏の子供たちの家庭教師になるかが取り沙汰されている。そのうえ、レーナル夫人の元小間使いが、懺悔の際にシェラン神父に夫人とジュリヤンの恋仲を暴露し、ジュリヤンの将来を心配した神父は、彼にブザンソンの神学校に行くことを強く勧める。また、

ヴェリエールの社交界でも彼と夫人の仲がとかく噂されるに及んで、レーナル氏としてもジュリヤンを自宅に留めおくことができなくなる。しかし一方、ことごとに張り合っている仲のヴァルノ氏にはジュリヤンを取られたくない。そこで、夫人の勧めに従って、神学校での1年間の学資としてジュリヤンに600フランを提供するという条件で、彼に町から離れてもらうことにする……。下掲のテキストは、そのような経緯があった直後の箇所である。

● テキスト (上巻247頁7行目～250頁5行目)

貧民収容所長が公然と申し込んできた八百フランの職を、夫の体面を考えて犠牲にしてくれるのだから、その埋め合せを受け取ってもすこしもはずかしくないではないかということを、ジュリヤンに納得させるのは、レーナル夫人としては、夫の場合より、なおさら骨が折れた。

5

ジュリヤンは幾度もいい返した。

「でも、わたしははじめっから、ほんの一瞬間でも、あんな男の申し入れを承諾する気はなかったんです。あなたのおかげで、上品な生活にすっかり慣れてしまいましたから、ああいう下品な連中には、とても我慢できないのです」

10

残酷にも切迫した事情の、鉄の腕の前には、ジュリヤンの意志も屈せずにはいられなかった。自尊心の手前、ヴェリエールの町長が出してくれる金を借りることにするが、五年後には元利ともに返済すると書いた証文を渡そうかなどと、つまらないことを考えた。

レーナル夫人は、山のなかの、例の小さな洞窟に、相変らず数千フランを隠してある。

15

彼女はジュリヤンが受け取らないだろうし、どなられるだろうとはわかっていながらも、おそろおそろその金を使ってもらえないだろうかといってみた。

「わたしたちの恋の思い出を、汚そうというつもりですか?」と、ジュリヤンはいった。

20

とうとう、ジュリヤンはヴェリエールを去った。レーナル氏は非常に喜んだ。いよいよレーナル氏から金を受け取らざるをえなくなったとき、ジュリヤンはこの犠牲があまりにも大きすぎると思った。彼はきっぱりことわった。レーナル氏は目に涙を浮べて、ジュリヤンの頸を
25
をかき抱いた。ジュリヤンが身分証明書を求めると、彼は感激のあまり、その品行を大いに賞めようとしても、うまい文句が出てこないあまりさまだった。ジュリヤンは五ルイの貯金があったし、フーケからも、五ルイを借りるつもりだった。

ジュリヤンはすっかり感動していた。だが、あれほど恋の思い出の
30
多いヴェリエールから一里も離れると、もはやブザンソンのような県の首都、大きな要塞都市を見る楽しみばかりを思いえがいていた。

この短い三日間の留守のあいだ、レーナル夫人ははげしい恋の幻想にたぶらかされていた。毎日がどうにか送れたのは、自分とぎりぎりの不幸のあいだに、ジュリヤンとの最後の密会が残されていたからな
35
のだ。彼女は、それまでの時間を計り、一分一秒を数えていた。ついに、三日目の夜、しめし合せておいた合図が遠くから聞えた。あらゆる危険をおかして、ジュリヤンが目の前にあらわれた。

この瞬間から、彼女はこれが見おさめだということしか考えなかった。恋人の愛撫に答えるどころか、まるで生ける屍のようだった。む
40
りに、恋しかったといおうとしても、どこか取ってつけたようで、ほとんど反対の気持ちをいっているように思えた。永遠の別れだという、いたましい思いが、片時も離れないのだ。猜疑心の強いジュリヤンはふと、もう忘れられたのかと思った。そうした怨み言をいっても、彼女は黙って大粒の涙を流し、痙攣したように手を握りしめるばかりだ
45
った。

「だって、こんな調子で、あなたが信じられますか？」と、ジュリヤンは、恋人のこうした冷たい応じ方に対していった。「デルヴィル夫人にだって、ほんの顔見知りのひとにだって、くらべものにならないくらい親しげな様子を見せるじゃないですか」

50

レーナル夫人は石像のようになって、返事もできなかった。

「あたしみたいに不幸な女がいるはずはない。……このまま死んでしまいたい。……心臓が冷たくなっていくようですわ……」

それがジュリヤンの聞きえたいちばん長い返事だった。

夜が白み、いよいよ出ていかなければならなくなったとき、レーナル夫人の涙は、まったくかれ果ててしまった。ジュリヤンが綱を結んで窓のところにしばりつけるのを、黙ったまま、キス一つ返そうともせず、眺めていた。

「これであなたが望んでおられたとおりにになりましたね。これからは良心の呵責もなく暮せるわけです。お子さんがちょっと具合が悪いからといって、お墓にでもはいつてしまったような気になることもないでしょう」

ジュリヤンはそんなことをいってみたが、むだだった。

「スタニスラスにキスしてやっていただけないのが残念ですわ」と、彼女は冷やかにいった。

ジュリヤンはこの生ける屍から、気のない抱擁を受けると、深く心を打たれてしまった。幾里も歩きつづけながら、そのことばかりが思い出された。心はめいるばかりだった。そして山を越すまでは、ヴェリエールの教会の鐘楼が見えるかぎり、いくたびも振り返って見た。

I 『読み解く』第5章の概念装置

小説を読むとき、われわれはそこに登場人物の存在を認める。また、一定の文体的特徴を持つ語り手の存在にも、人によって多少の違いはあっても注意を払う。この内、登場人物どうしの関係は、対照的であることが多い。その対照性には、大画面的である場合と点描的である場合とがある。

例えば、同一場面にいる登場人物Aがいままさに陶酔の最中にあるのに対して、登場人物Bが厳しい現実を直視しているといった状況は、大画面的対照を表象する。その同じ状況で、ある小道具(『読み解く』第5章では「ピストル」)

を巡って、一方が驚きを露にするのに対して、他方がきわめて冷静に構えていれば、その対比は点描的である。登場人物どうしのコントラストを浮き彫りにするに当たって、語り手はこれらの2つの事象を言説のなかに盛り込む。そのほうが、対照を効果的に表すことができるし、ひいては読者に多大なインパクトを与えられるからである。

また、対照的喚起は、同一場面の内での対比に基づいていることもあれば、異なる2つの場面どうしでの対比に基づくこともある。たとえば、若い男女の濃密な恋愛関係が描かれた直後に、その関係が冷めかかった時期の2人の描写が続けば、これは異なる時空のあいだでの対比である。そして、この場合でも、大画面的対照に加えて点描的対照が支えとなり得る。『読み解く』第5章では「財布」が小道具として用いられていた。

大画面的対照に点描的対照を重ねるのは、一種の反復法に他ならない。そこからは強調効果が醸成される。それに対して、対照はそれ自体の内にレトリック効果を孕んでいる。だから、対照法も、反復法と同様に小説文のなかで多用される。読者は、小説の文章のなかに現れるさまざまなコントラストの妙を味わう。コントラストに出会うたびに、われわれ読者は新鮮な驚きを覚える。もしそのような驚きが無ければ、いま読んでいる小説を読者は放擲してしまいかねない。無味乾燥だからだ。

小説の語り手もしくは記述者は、反復と対比を織り交ぜながら、ドラマチックな言説を編み上げていく名手である。

ところで、語り手が登場人物の心理や言動に寄り添う度合と頻度が高いほど、語り手と登場人物の距離が接近する。これは、対人関係においてわれわれが日頃から経験することと符合する。

そして、小説には主人公がいる。『読み解く』第5章のテキストでは、概ねジャンヌとジュリヤンがそれぞれ主演女優と主演男優である。語り手はもっぱら彼らに感情移入を行いつつストーリーを展開する。読者も、彼らの心理や言動に自己を同化しながらストーリーを辿っていく。

そうするとき、われわれは常に語り手の存在を感じ取っているのではない。心理の描写や言動の喚起が詳細であればあるほど、それらを紡ぎ出している語

り手の存在を読者は意識しないものだ。読者の同一化の対象は、語り手ではなく登場人物だからである。そのようなとき、詳細なストーリー展開の背後に存在する語り手を想像の埒外に置いて、われわれは登場人物にほとんどなりきってしまう。

これとは逆に、描写の粗いところ、すなわち「事実」が淡々と羅列されているところでは、登場人物と読者の一体化の度合いが低下する。その結果として、それらの「事実」を並べている語り手の存在感が増大する。つまり、小説文が物語化することによって、語り手の声を読者の耳に届いてくる。単なる物語ではない小説らしい箇所は、心理や言動の詳しい喚起がなされている箇所であるが、往々にして小説文には繋ぎでしかない箇所がある。そこにおいて聞こえてくるのは語り手の声だけである。

また、語り手がストーリー展開の最中に闖入してくることもある。登場人物の心理や言動を臆面もなく自ら評価することがある。ここにおいて、語り手の存在感をわれわれは最も痛烈に受け止める。もっとも、裏には裏があるように、語り手の闖入を仕掛けている別の語り手が存在する。つまり、より高い次元に立つ語り手がいる。このように見ると、そもそも語り手は一枚岩の存在ではなく、幾つもの層から成り立つ存在だとわかる。たとえば、シノブシスを受け持つ語り手がいても良いだろう。こうしたことは、実は読者についても同様に言えることである。

II テキストの分析

大づかみに言って、本テキストは2つのテーマを扱っている。すなわち、金銭に関するジュリヤンの潔癖さと、密会でのジュリヤンとレーナル夫人の心理である。

まず、神学校での1年間の学資としての600フランを、レーナル夫人の達での懲恫にも関わらず、ジュリヤンがなかなか受け取ろうとしないことが挙げられる。「残酷にも切迫した事情の、鉄の腕の前には、ジュリヤンの意志も屈せずにはいられなかった」（11～12行目）とあるように、一旦は受け取ることに

決めたが、「いよいよレーナル氏から金を受け取らざるをえなくなったとき、ジュリヤンはこの犠牲があまりにも大きすぎると思った。彼はきっぱりことわった」（23～25行目）に見られるように、結局は600フランを断念してしまう。

また、自分が隠し持っているカネを、レーナル夫人はジュリヤンに使ってほしいと「おそろおそろ」（18行目）頼むのだが、それに対してジュリヤンは、「わたしたちの恋の思い出を、汚そうというつもりですか？」（20行目）と応じる。

この応答からは、金銭面だけではなく、恋愛面においてもジュリヤンが際立った理想主義者であることが窺える。語り手は、反復法に依拠して、ジュリヤンの美しいポートレートを描き出している。

そのような理想主義的なジュリヤンと対蹠的なのがレーナル氏である。件の600フランを受け取ることをジュリヤンが断ったときのレーナル氏の反応は、25～28行目で次のように喚起されている。

レーナル氏は目に涙を浮べて、ジュリヤンの頸をかき抱いた。ジュリヤンが身分証明書を求めると、彼は感激のあまり、その品行を大いに賞めようとしても、うまい文句が出てこないありさまだった。

ここには、レーナル氏の吝嗇さが、2つの文で描き出されている。いずれの文も、レーナル氏の物惜しみな性格を誇張的に描いているが、2つの文にわたってそれが触れられているからこそ、反復法に由来する強調効果が醸成されている。また、このように戲言的に氏の吝嗇さ加減が強調されているので、ジュリヤンの廉潔さが際立ってくる。

反復法と対照法の組み合わせによって、文章のドラマチック性が高揚されているわけだ。なお、ここでの対照は「600フラン」と「身分証明書」の2つの小道具に依拠している。

次のテーマ、すなわち、最後の密会でのジュリヤンとレーナル夫人の心理状態については、30～32行目にこうある。

ジュリヤンはすっかり感動していた。だが、あれほど恋の思い出の多いヴェリエールから一里も離れると、もはやブザンソンのような県の首都、大きな要塞都市を見る楽しみばかりを思いえがいていた。

ここでは、レーナル夫人との過ぎ去った愛の日々に対して、ジュリヤンが意外

に恬淡としている様子が喚起されている。望み多き青年が自分の将来を頼む姿を、語り手は素描している。

ところが、レーナル夫人はそうではない。彼女はジュリヤンとの別離を心底から嘆いている。自分にとってこの世の全てである若者を失うことに深く戸惑っている。その模様は、たとえば、33行目からの次の箇所から歴然としている。

この短い三日間の留守のあいだ、レーナル夫人ははげしい恋の幻想にたぶらかされていた。毎日がどうにか送れたのは、自分とぎりぎりの不幸のあいだに、ジュリヤンとの最後の密会が残されていたからなのだ。彼女は、それまでの時間を計り、一分一秒を数えていた。

これらの2つの引用箇所はテキスト中に連続して現れる。だから、夫人とジュリヤンの心理状態の対照は明白である。そして、このことは密会の最中についても同様に言える。したがって、この「最後の密会」のテーマにおいても、反復による強調と対照によるインパクトを組み合わせることによって、語り手はわれわれに深甚な印象を与えている。

けれども、最も鮮明なコントラストは、上掲の30～32行目と本断章を結ぶ次の段落とのあいだに、構築されていると言えよう。

ジュリヤンはこの生ける屍から、気のない抱擁を受けると、深く心を打たれてしまった。幾里も歩きつづけながら、そのことばかりが思い出された。心はめいるばかりだった。そして山を越すまでは、ヴェリエールの教会の鐘楼が見えるかぎり、いくたびも振り返って見た。

ジュリヤンが「深く心を打たれてしまった」のは、レーナル夫人の自分に対する愛情の底知れなさに、いまさらながら気づいたからである。レーナル夫人は、もっぱらジュリヤンとの愛情関係に縋りながら、日々を送っていた。だから、その愛情関係が絶たれてしまうときに当たって、自分の存在理由を失ってしまう。夫人が「生ける屍」と化してしまったのはこのためである。

実際には、これが2人の永遠の別離とはならない。けれども、いまの時点では、夫人は、これがジュリヤンと会う最後の機会だと思い込んでいる。

小道具はここの辺りにはあまり見当たらない。強いて言えば、56行目に出てくる「綱」が注目される。これは37～38行目の「あらゆる危険をおかして、ジュ

リヤンが目の前にあらわれた」に呼応する小道具である。ジュリヤンの身のこなしの軽やかさを示唆する「綱」であるが、それを攀じ登るときの彼の情熱と、それを伝って下の地面に降りるときの彼の沈鬱な気持ちが、対照的に描かれている。この小道具は、ジュリヤンの心理面の激変を描くための一つの支えとして用いられている。

＊

語り手と所与の登場人物との距離は、語り手がその登場人物の心理や言動に寄り添う度合の高さと逆比例する。これは、読者と登場人物の関係についても同様に言えることである。その間の事情は、映画館での観客と登場人物との関係によく似ている。

本断章では、36～37行目の「ついに、三日目の夜、しめし合せておいた合図が遠くから聞えた」から66～67行目の「ジュリヤンはこの生ける屍から、気のない抱擁を受けると、深く心を打たれてしまった」までのシーンにおいて、描写が最も詳細である。この最後の密会の場面で、語り手も読み手もジュリヤンとレーナル夫人に最も接近する。それほど2人の心理や言動が事細かに描かれている。

ところが、このように描写の筆が細やかであると、われわれ読者は、描写の主体である語り手あるいは記述者の存在を、念頭から減却する。そして、ジュリヤンとレーナル夫人のことしか考えられなくなる。だから、2人の最後の密会の有り様がどんなものかを期待して読み進めてきた読者は、案に相違してそれが悲嘆に満ちたものであるのを目撃して一驚を喫する。約束どおりジュリヤンがレーナル夫人の目の前に現れた瞬間から、彼が夫人の許を窓から辞する瞬間まで、夫人が「石像のようになって」（51行目）絶望を嘯み締めている様子に、我がことのように眺め入る。

同様のことはあらゆるシーンについても言えるだろう。ある小説を読んで、相当の時間が経過しても、なお読者の脳裡に浮かびくるのはシーンである。これは、読み手がそこにおいて登場人物と密に一体化したからである。そこが、読者による追体験のいちばん深かった箇所だからである。

そのために、すでに引用した、この断章の末尾の1段落などは、われわれの

記憶には永く留まらない。

ジュリヤンはこの生ける屍から、気のない抱擁を受けると、深く心を打たれてしまった。幾里も歩きつづけながら、そのことばかりが思い出された。心はめいるばかりだった。そして山を越すまでは、ヴェリエールの教会の鐘楼が見えるかぎり、いくたびも振り返って見た。

この件は単なるナレーションである。ここにおいて聞こえてくるのは、たとえジュリヤンの重苦しい心境が喚起されていても、語り手の声のみである。シーンの切迫感はこの中には存在しない。このような箇所では語り手と読み手が顔を付き合わせることになる。ストーリーの緊迫感が緩む繋ぎの箇所は、このような特徴を有している。

＊

語り手が小説の文章のなかで自らの顔を覗かせることは、それほど稀ではない。例えば次の件（11～14行目）は、語り手の闖入のニュアンスを色濃く帯びている。

残酷にも切迫した事情の、鉄の腕の前には、ジュリヤンの意志も屈せずにはいられなかった。自尊心の手前、ヴェリエールの町長が出してくれる金を借りることにするが、五年後には元利ともに返済すると書いた証文を渡そうかなどと、つまらないことを考えた。

最初の文の言い回しから感じ取られる響きには、紙芝居の口上のそれとよく似たものがある。これは本断章の随所について言えることであって、それによって物語性が際立つ恰好になっている。

また、ここの引用文の末尾には「つまらないこと」という語り手の直截的な評価の言葉が認められる。「ヴェリエールの町長が出してくれる金を借りることにするが、五年後には元利ともに返済すると書いた証文を渡そう」という考えは、どこが「つまらない」のだろうか。小説の主人公の思念としては、あまりにもロマネスク性に欠けるということかもしれない。

それに対して23～25行目は大いにロマネスクである。

いよいよレーナル氏から金を受け取らざるをえなくなったとき、ジュリヤンはこの犠牲があまりにも大きすぎると思った。彼はきっぱりことわった。

この件からは、われわれの主人公の廉潔さが如実に伝わってくる。最後の瞬間において翻意するという結構もそれに一役買っている。

小説の主人公はさまざまな試練を乗り越えて自己を実現する。そして、廉潔さをいつも持っている。ジュリヤンが崇拝するナポレオンも、一将校から皇帝にまで上り詰めた。けれど、『赤と黒』全編には冒険小説の雰囲気の色濃く漂っている。

ジュリヤンのこの清廉さと真っ向から対照をなすのが、レーナル氏の貪婪さである。すでに取り上げたが、語り手は、レーナル氏のカネへの執着心を、前掲箇所の直後で次のように戯画化している。

レーナル氏は目に涙を浮べて、ジュリヤンの頸をかき抱いた。ジュリヤンが身分証明書を求めると、彼は感激のあまり、その品行を大いに賞めようとしても、うまい文句が出てこないありさまだった。

ここでも語り手の闖入のニュアンスが色濃く認められる。レーナル氏の滑稽さは、単にジュリヤンの清廉さと対をなすだけではない。その利己心は、レーナル夫人の思い遣りの心とも、強いコントラストをなしている。夫人は、ジュリヤンが手元不如意であることを心から心配している。例えば、次のような件（15～19行目）からそれが窺われる。

レーナル夫人は、山のなかの、例の小さな洞窟に、相変らず数千フランを隠してある。

彼女はジュリヤンが受け取らないだろうし、どなられるだろうとはわかっていながらも、おそろおそろその金を使ってもらえないだろうかといってみた。

本断章では、不倫を犯していながらも、互いに清廉な気持ちを持っているジュリヤンとレーナル夫人が、カネへの執着心の異常に強いレーナル氏と、対照的に描かれている。そのコントラストは戯画的に書き表されている。そこには語り手の作為が滲み出ている。だから、読者は、そのぶん語り手の存在を明瞭に意識する。そう言えば、同様のことが『読み解く』の主人公ジャンヌとその夫とのあいだにもしばしば見受けられた。

Ⅲ まとめ

小説文は反復と対比の連鎖である。このことは、『読み解く』第5章に引き続き、今回の分析でも確認された。

例えば、ジュリヤンに感情移入するとき、読者はこの青年の潔い身の処し方に爽快感を覚える。それには反復法が与って力がある。レーナル夫人の申し出も、レーナル氏からの援助も断って、自分の身ひとつで将来を切り開こうとするジュリヤンの姿勢には、才能と野心に溢れる若者の矜持が漲っている。

それに対して、対比の面が強調されているのは、最後の密会でのレーナル夫人の有り様とジュリヤンのそれである。この密会を楽ししいものにしようと思いついていたに相違ないジュリヤンであったが、レーナル夫人のほうは絶望のあまり石像のように佇立したままである。

ここにおいて、端無くも、読者は夫人の愛情の底深さを知って驚く。居残る者の遣る瀬無さと旅立つ者の勇ましい心根のコントラストに、心を打たれる。とりわけ、夫人のほうはこれが最後の逢瀬だと思い込んでいる。ジュリヤンのほうは、そうだとはいずれも思っていない。2人のあいだの対照のニュアンスが濃厚である。

語り手は反復と対照を巧みに織り交ぜながら、ストーリーを展開していく。淡々と、あるいは重厚に、一様にストーリーが展開されるのであれば、読者も登場人物たちに感情移入をし続けられる。けれども、本断章の語り口調からは、語り手の心的傾向が強く滲み出ている。われわれ読者は、そういった語り手の存在にも気を配りながら、本断章を、ひいては『赤と黒』全編を読み進めなければならない。先に、ここでの語り手の口調は、紙芝居の口上と似ていると指摘した。それほど語り手の存在が陰に陽に垣間見られるのが本断章である。

第6章 レトリック

● 前章からの梗概

レーナル邸で家庭教師として1年余りを過ごしたのち、20歳のジュリヤンはシェラ

ン神父の勧告に従ってブザンソンの神学校に入学する。その初日、シェラン神父から手紙で依頼を受けていた校長ピラール神父は、試験を兼ねた、ジュリヤンとの3時間に及ぶ面談ののちに、彼を全額給費生として採用する決定を下す。神学校でジュリヤンは勤勉一筋の生活を送ることになるが、その勉強の内容には懐疑の念を禁じ得ないのだった。下掲の文章は、神学校での生活が始まっておそらく数週間が経った頃のことを述べている。

● テキスト（上巻276頁9行目～279頁8行目）

《おれは世の中から忘れられてしまったのか?》と、ジュリヤンは思った。ピラール神父がときどきディジョンの消印のある手紙を受け取っては、これを火にくべてしまっているのを知らなかった。その手紙はどう見ても悪いところのない文章なのだが、はげしい情熱が裏書きされていたのである。深い後悔がその恋心をおさえようとしているように思われた。《すくなくとも、あの青年の恋した女が不信心な女でなくてよかった》と、ピラール神父は考えた。 5

ある日、ピラール神父は、どうやら涙で半ばかき消されたいし手紙を開いた。最後の別れを告げる手紙だった。ジュリヤンに向って、こういつている。「神さまのおかげで、わたくしはやっと、わたくしの 10 過ちを憎めるようになりました。わたくしにこの過ちを犯させたひとを憎むのではありませんわ。そのひとは、これからもやはり、この世でわたくしのいちばん大事なひとに違いありませんもの。もう諦めることにしましたの、あなた。ごらんのとおり、涙が出て仕方ありません。わたくしは子供たちの幸福を考えなければなりませんし、あなた 15 もあれほどかわいがってくださった子供たちのことですもの、やっぱり子供たちが問題ですわ。正しい、けれどもおそろしい神さまが、母親の罪の報いを、あの子たちの上にお下しになることはもうありますまい。これでお別れします、ジュリヤンさま、ほかのひとを悪く思ったりなさらないように」 20

この手紙の終りはほとんど読めないくらいだった。ディジョンの宛

名が書いてあったが、けっして返事をよこさないように、返事をよこすにしても、せめて貞淑な妻に立ち戻った女が聞いても、顔を赤らめることがないような言葉づかいをしてほしいと書いてあった。

ジュリヤンの憂鬱は、賄方が神学校で出す八十三サンチームの食事 25
のひどい献立のせいもあって、健康にも影響してきたが、ある朝、フーケが、思いがけず、ジュリヤンの部屋に姿をあらわした。

「やっとはいれたんだ。どうこういうわけじゃないが、会おうと思っ
てね、これで五度もブザンソンに来たんだよ。いつも閉ってるんだ。
ひとに頼んで、神学校の門で待ち伏せさせたんだが、どうしてきみは 30
一度も出てこないんだ？」

「試練のつもりでそうしてるんだ」

「変っちゃったな。とにかく会えてよかった。五フラン銀貨を二枚や
ったんだ。はじめ来たときからやっておけばよかったものを、おれも
間抜けだったわけさ」 35

ふたりの親友の会話はつきなかった。

「ときに、知ってるかい？ きみの教え子の母親ってのが、ひどく神
さまにこっちまってね」

と、フーケにいわれて、ジュリヤンは顔色を変えた。

だが、フーケは例の無頓着さで話し続けた。情熱的なジュリヤンの 40
心は、いいしれない衝撃を受けたのだが、フーケのほうは、いっこう
気がつかずに、相手のいちばん大事な秘密をかき乱したわけだった。

「そうなんだよ、きみ、ものすごいんだ、その信心ぶりが。なんでも
聖地めぐりをするんだってさ。だが、マスロン神父のやつ、一生の恥
をかいたわけなんだ。あのシェランさんの様子をしょっちゅう探って 45
いた男さ。なにしろ、レーナルの奥さんのほうで、マスロンなんか相
手にしないんでね。奥さん、ディジョンだかブザンソンへ告解に行く
そうさ」

「ブザンソンに来るんだって！」と、ジュリヤンは顔を真っ赤にして
いった。 50

「ちょくちょく来るらしいんだ」と、フーケは、けげんな顔をして答えた。

「きみ、『立憲新聞』もってないかい？」

「なんだって？」

「『立憲新聞』をもってるかって、きいてるんだ」と、ジュリヤンは落
ち着きはらっていった。「ここじゃ一部三十スーで売れるからね」

「へえ！ 神学校にも自由主義者がいるのか！」と、フーケは叫んだ。
そして、マスロン神父の偽善的な声音と柔和な調子のまねをしながら
「哀れなるフランスよ！」と、つけ加えていった。

この訪問はジュリヤンに深い感銘を与えたはずなのであるが、その
翌日には、あれほど子供だと思っていた例の小さなヴェリエール出の
神学生にいわれた一言から、重大なことを発見したのだった。神学校
にはいつ以来、ジュリヤンはなにをやっても、へまのしどおしだっ
たのだ。彼は苦々しげに自嘲した。

なるほど、日常の重要なふるまいは、巧妙にはちがいがなかったが、
細かな点に注意がいきとどかなかった。ところが、神学校の老練な連
中はもっぱら細かな点をとにかくいう。したがって、ジュリヤンは早
くも仲間のあいだで自由思想家とされていた。つまらないことで、
のべつしっぽを出していたのである。

I 『読み解く』第6章の概念装置

文章を魅力的なものにする種々の工夫は文彩と呼ばれ、それらの総体がいわゆるレトリックを形成する。そして、文彩は小規模なものから大規模なものまでいろんなサイズがある。また、その性質に基づいて、意味的文彩・統語的文彩・音声的文彩の3つに分類することができる。もっとも、これらの特徴の複数を兼ね備えた文彩も存在する。例えば、「対句」は明らかに3つの全てに跨っている。

『読み解く』第6章の断章では、イポールという漁村のうらぶれた様子が描

かれていた。たとえば、「まどろんだような村」という表現では、「まどろむ人」と「寒村」の2つのイメージが重ね合わせられていた。いわゆる比喩である。この文彩のほかにもさまざまなものが駆使されていたが、ここでは比喩に焦点を絞ることにしよう。

「冬の漁村の沈滞」という主題は、中規模的には、すでに触れた例を含めて3つの比喩によって浮き彫りにされていた。すなわち、ほかにも「浜辺一帯に横倒しにされている大きなボートは、死んだ大きな魚のようだった」「暗い小道の重い眠り」といった言い回しがなされていた。いずれも否定的な響きのする表記であり、主題とよくマッチしていた。

小規模な文彩を取り出そうとすると、われわれの視座は局所的な性質を強く帯びる。中規模な文彩を明らかにしようとするときは、一まとまりの言説の主題と、そこで用いられている文彩との相関性に、われわれの分析の眼が注がれる。それに対して、大規模な文彩を掘り出すときのわれわれの眼は、所与の文章を大掴みに把握することに集中する。このように分析者の眼は、しなやかにして多様である。もっとも、これは至極当然なことなのかもしれない。むしろ困難なのは、それぞれの規模に分析の眼を固定して、そこから言説を解剖することであるかもしれない。

『読み解く』第6章のテキストは、「森を抜けていくイポールまでの散歩→夕暮れどきのイポールの情景→イポールでの父と娘の会話→街道を歩いていくイポールからの帰途」の4つの場面から成り立っていた。そして、そのいずれもが「人間の孤独」を喚起していた。つまり、断章全体に「人間の孤独」というテーマが染み渡っていた。また、そのテーマは、個々の場面においてイメージ豊かな比喩表現で美しく描き出されていた。

例えば、「森を抜けていくイポールまでの散歩」では、主人公ジャンヌとその夫との夫婦仲の疎遠が、冬の雑木林の寂寥に仮託されていた。「イポールでの父と娘の会話」は、「地中海」をめぐる心象が父と娘とで大きく懸け離れていることに言及していた。ジャンヌにとっての「地中海」は、愛の紐帯を表象する存在として、彼女の脳裡に深く刻み込まれていたのである。

見られるように、比喩はいろんな規模で用いられ得る。反復法もそうだ。こ

れは前々段ですでに触れたことであるし、そうでなくても容易に推測できることである。

それに対して、「暗い小道の重い眠り」のなかの「重い」に認められる多義法、すなわち、「静まり返った」の意と「陰鬱な」の意を同時に表す手法は、点括的にしか用いられないようだ。もっとも、この多義法にしても、中規模ないしは大規模に用いられる契機を常に孕んでいる。ポール・ヴァレリーの詩のあるものは、多義法に大規模に依拠していることが想起される。

II テクストの分析

本断章の第1段落には、「その手紙はどう見ても悪いところのない文章なのだが、はげしい情熱が裏書きされていたのである。深い後悔がその恋心をおさえようとしているように思われた」（3～6行目）との件が見られる。ジュリヤンこそ知らないでいるが、レーナル夫人は辛いジレンマに陥っている。「後悔」と「恋心」の板挟みに遭って苦しんでいる。われわれも日常生活において種々のジレンマを経験するものだが、多くの場合には何とか妥協点を見出して、それらを克服する。これに対して、レーナル夫人は苦しいジレンマに打ち勝てないでいる。

それは「最後の別れを告げる手紙」においてもそうである。「ディジョンの宛名が書いてあったが、けっして返事をよこさないように、返事をよこすにしても、せめて貞淑な妻に立ち戻った女が聞いても、顔を赤らめることがないような言葉づかいをしてほしいと書いてあった」（21～24行目）とあるが、悔いと恋とのジレンマというテーマは些かも変わっていない。レーナル夫人は、字面とは裏腹に心の奥底では、ジュリヤンからの情熱的な返事を期待していると解釈できる。

ジレンマに陥るのは、小説の登場人物にあってはよくあることである。本稿第2章のテキストにも「義務が気おくれと交える必死の果合いはあまりにも苦しかった」（35～36行目）とある。このような葛藤は、読み手を登場人物の心理へと強く惹きつけるうえで効果的である。

レーナル夫人のこのジレンマは、読む人によっては、中規模な文彩だと受け止められるかもしれない。テキストの少なくとも2箇所、それが触れられているからである。本断章においてより明瞭に小規模な文彩だと認められるものとしては、「フーケのほうは、いっこう気がつかず、相手のいちばん大事な秘密をかき乱したわけだった」（41～42行目）、「『ブザンソンに来るんだって！』と、ジュリヤンは顔を真っ赤にしていった。／『ちよくちよく来るらしいんだ』と、フーケは、けげんな顔をして答えた」（49～52行目）、および、「つまらないことで、のべつしっぽを出していたのである」（68～69行目）が挙げられる。これらは表記のうえで点括的である。

「大事な秘密をかき乱す」とは、けだし思い切った言い草である。通常ならば「大事な秘密を抱えている心をかき乱す」とでも言うところだろう。けれども、そう言ってしまうと、もとの表現の簡勁さが損なわれてしまう。「心」を容器に準え、「秘密」をその内容だと見なせば、ここでは提喩が見事に用いられていることがわかる。提喩とは、部分によって全体を、全体によって部分を表す比喩のことである。

2番目の例では、「顔を真っ赤にするジュリヤン」と「けげんな顔をするフーケ」とが対置されている。同一場面にいる2人の登場人物が対照的な反応をする一齣である。このような対照法は、個々の人物像を鮮やかに描き出すうえで効果的である。『読み解く』第5章のテキストにおいても、主人公ジャンヌと宿の民家のコルシカ女とがコントラスト豊かに描かれていたことが想起される。いまの場合には、読者はジュリヤンに感情移入をしているわけだから、われわれは彼の驚愕を切実に受け止めるのであり、フーケの怪訝な面持には第3者的な眼差しを投げかけるに留める。

最後の例の「しっぽ」は、「自由思想家としての側面」といった内容を含意している。そして、「しっぽを出す」とは、ジュリヤンを狐狸に例えた寓喩にほかならない。多くの寓喩がそうであるように、語り手は、ここで自分とジュリヤンとのあいだに一定の距離を置いている。あるいはジュリヤンを揶揄しているとも言えるのであって、彼をいくぶん突き放し、その行状を些か冷淡に眺めている。そうであるからこそ、われわれ読者は、ジュリヤンを親身に思い、

今後の彼の挙動を注視しようと身構える。

＊

中規模な文彩としては、1～24行目を取り上げることにしよう。この箇所
の冒頭には《おれは世の中から忘れられてしまったのか？》とのジュリヤンの自
問が布置されている。ジュリヤンこそ知らなかったが、レーナル夫人は彼にた
びたび手紙を送っていたのである。だから、冒頭の1文とその後の箇所とは歴
然とした対照を成している。因みに、この冒頭文は、26行目からの「フーケの
訪問」とも対照の関係にある。

ピラル神父によって火にくべられてしまう、レーナル夫人がジュリヤンに
宛てた手紙は、2段階に分けて喚起されている。ピラル神父がときどき傍受
し焼却した「ディジョンの消印のある手紙」（2行目）と「最後の別れを告げ
る手紙」（9行目）の2段階である。

第1段階では、レーナル夫人の幾通かの手紙は、反復の相のもとに一まとめ
にして喚起されている。いわく「その手紙はどう見ても悪いところのない文章
なのだが、はげしい情熱が裏書きされていたのである。深い後悔がその恋心を
おさえようとしているように思われた」（3～6行目）とある。したがって、
この箇所は「最後の手紙」を浮き彫りにするための背景を成しているといえる
ことができる。反復的事象が1度だけ触れられているケースであり、本稿第1章
で述べたことと符合している。ただし印象的な対照法である。

その結果として、「最後の別れを告げる手紙」が一際クローズアップされる
ことになる。この書簡に特徴的なのは、「涙で半ばかき消され」（8行目）とい
うことである。発信者であるレーナル夫人自身が「ごらんのとおり、涙が出
て仕方ありません」（14～15行目）と述べている。即物的な存在である「涙」
が人の心を表す文面を滲ませている手紙とは、甚だロマンチックな対象である。
「これでお別れます」と文末のほうに認めてあるものの、レーナル夫人の涕
涙は、夫人が諦念とはほど遠い心境にあることを如実に物語っている。だから、
この書簡は全体としてきわめてアイロニカルだと言わねばならない。

そのことは21行目からの1段落についても言える。いわく「返事をよこすに
しても、せめて貞淑な妻に立ち戻った女が聞いても、顔を赤らめることがない

ような言葉づかいをしてほしい」とあるが、この字面には、ジュリヤンとの情熱的な恋を再燃させたいとの、レーナル夫人の裏の心が見え隠れしている。そのように見るならば、この箇所もアイロニーの様相を帯びていると言える。前節で述べた夫人の苦しいジレンマが、アイロニカルな言辭を通して垣間見られる件である。

あるいは、夫人の涕涙は真心からのものであるはずなので、「これでお別れます」（19行目）との言葉も、夫人の諦念を直截的に表しているとする向きもあるかもしれない。しかし、この解釈は21行目からの1段落と齟齬を来す。この段落は、「夫人の諦念」と明らかに背反する内容を含むからである。

＊

本断章は「《おれは世の中から忘れられてしまったのか？》と、ジュリヤンは思った」という言辭で始まっている。これを「ジュリヤンの孤独」と呼ぶならば、その「孤独」なるものは、このテキストを通じて3つの方向から否定されている。

ジュリヤンが眼にし得ないレーナル夫人からの手紙、「これで五度もブザンソンに来たんだよ」（29行目）と言うフーケの訪問、ヴェリエール出の小さな神学生の忠告の3つの要素がそれである。ジュリヤンが決して孤独の状態に置かれていないことを、これらの3つの要素が連続的に述べている。もっとも、レーナル夫人は場面に登場しない。また、ジュリヤンは彼女からの書簡を眼にし得ない。だから、最初の要素に関しては、語り手と読み手、そしてピラル神父のみがその存在を知り得る。だから、「3つの要素」と言っても、それはわれわれの眼前にだけ現れる要素であって、ジュリヤンの眼に映るのは最後の2つでしかない。

そういう留保をしておかなければならないが、レーナル夫人、フーケ、小さな神学生の3者がテキスト上につぎつぎと登場する。「ジュリヤンの孤独」というテーマに、3者がいろんな角度から接近している。あるいは、接近しようとしている。そういう意味で、ここの断章はバリエーション（変化の妙）に富んでいる。

バリエーションは、要素が3つであるときに最も軽やかである。それより多

くなると鈍重さが目立ってしまう。『読み解く』第6章では、「人間の孤独」のテーマが、4つの場面で繰り返し触れられていたが、そこからは多分に重苦しさが感じ取られた。その雰囲気はテーマの荘重さにマッチしていたが、一般にバリエーションは3つの要素から成り立つ。

ところで、本断章のストーリーは、対照法を原動力として勢いよく展開されている。レーナル夫人は書簡をジュリヤンに宛てて送っているのだが、ピラル神父によってインターセプトされていることを知らない。したがって、夫人の思い込みには、相手が意図していない断絶が含まれている。《おれは世の中から忘れられてしまったのか?》と自問するジュリヤンの場合にも、同じことが言える。

ジュリヤンのこの思いは、「ある朝、フーケが、思いがけず、ジュリヤンの部屋に姿をあらわした」（26～27行目）ことによって断ち切られる。対照の妙味をわれわれ読者が感じ取るのは言うまでもない。さらに、フーケのこの来訪自体にも対照法が用いられている。まず、フーケが何気なくレーナル夫人のことを話題にのぼせたときに、ジュリヤンは著しく動揺する。それを気取られないために、今度はジュリヤンが『立憲新聞』について云々して、フーケを驚かせてしまう。驚愕を覚える人物が、ジュリヤンからフーケへと逆転してしまうわけである。

最後に、フーケの来訪に喜びを覚えたのも束の間、ジュリヤンはヴェリエール出の小さな神学生から自分の拳止の至らなさを教わり、「苦々しげに自嘲する」（64行目）羽目になる。周囲の者から「自由思想家」のレッテルを貼られていることを、はじめて自覚する。

小説のストーリーは、対比と反復に基づいて展開される。見られるように、本断章では対比の力が大きく働いている。因みに、バリエーションは、対比と反復とが協同して成り立つ文彩である。

Ⅲ まとめ

前節の冒頭で取り上げた「ジレンマ」は、小説文において頻々と用いられる

文彩である。『読み解く』第6章の第3場面でも、英仏海峡を讚美して止まない父に対して、「ジャンヌは溜息をつきながら、父親の言うことに同意した／『そうね、パパがそうおっしゃるのだったらね』／だが、彼女の唇にのぼったこの『地中海』という言葉が、またしても彼女の胸をしめつけ、思いのすべてを、彼女の夢が埋められているあの遠い国へ通わせていた」とあるように、主人公ジャンヌは、表面では父親の言うことに従順でありながら、内心では「地中海」の象徴性に心を寄せていた。おそらく、このような葛藤は、小説の主人公たちにあっては重要な側面なのであろう。登場人物たちのジレンマは、深ければ深いほど、われわれ読者の心を強く掴む。

「最後の別れを告げる手紙」（9行目）については、「手紙」と「涕涙」とがオーバーラップしている。「別れ」という共通部分でこれら2つの事象が結びつけられているのだから、2者は直喩の関係にあると見なすことができる。あるいは、「涕涙」が「別れ」を象徴していると考えれば、2者は提喩によって結ばれていると見なせる。いずれにしても、ロマンチックな比喩である。

大規模な文彩については、この断章においてバリエーションと対照法にわれわれは着目した。これらは伸縮自在な文彩なのだが、ここでは大規模な文彩としてとらえたわけである。この2つの文彩は本テキストの構造化に関わっている。「文章構造」については次章でまとめて取り扱うが、レトリックが文章の組み立てに深く関与していることが、本テキストの分析によって明らかになったはずである。

実は、筆者ははじめ、本テキストがレトリック性において淡白なのではないかとの危惧を抱いていた。レトリックの観点からこのテキストに迫っても、大した言説を編み出せないのではないかと不安を覚えていた。それほどこの断章では、淡々とした運筆がなされているからである。

ところが実際は、見てきたように、本断章には興味深い文彩が数多く含まれていた。結局のところ、レトリックは文学的文章には不可欠であって、それを抜きにしては、読者を惹きつける名文を作家が物することはできないのだと言えそうである。もっとも、個々の作家がどれだけ意識的にレトリックをとらえているかは、自ずと問題が異なってくる。

第7章 文章構造

● 前章からの梗概

神学校でのジュリヤンの暗い生活は1年余り続いたが、その終わりの頃に、ジュリヤンを愛弟子と見なすようになっていたピラール神父が神学校長の職を辞して、知り合いであるバリのラ・モール侯爵の許に赴く。そして、有能な秘書を求めている侯爵に、神父はジュリヤンを推薦する。侯爵がそれに同意すると早速、神父はジュリヤンをバ리에呼び寄せるために手紙を送る。その手紙を受け取るや、その日のうちにジュリヤンはブザンソンを後にするが、パリへと立ち去る前にレーナル夫人に会いたいと思う気持ちを抑えかねた彼は、翌日の真夜中過ぎにヴェリエールのレーナル夫人の寝室に梯子で忍び込んでいく。しかし、2時間話し合っても、自らに誓った貞節を堅く守ろうとするレーナル夫人は、ジュリヤンにこのまま帰ってくれるよう頼み続けた。下掲の文章は、2人の間にそのような遣り取りがあった直後の箇所である。

● テクスト（上巻343頁7行目～346頁4行目）

《追い返されたら、いい恥っさらしだ！ それこそ一生悔恨で悩まされることになる。もう手紙なんかくれるものか。おれがこの土地にいつ戻ってこられるかもわかりゃしない！》そう思うと、たちまち、ジュリヤンの清らかな気持は消えてしまった。愛する女のそばに腰をおろし、あれほど楽しい思いをしたこの部屋で、その女を腕に抱きしめ 5
るようにし、濃い闇のなかとはいえ、さきほどから女が泣いていることは確かだし、胸の動きから察して啜り泣いていることがわかってみると、ジュリヤンは情けないことに、一個の冷静な策略家になってしまった。それはちょうど、神学校の校庭で、自分よりも腕力のある同輩のひとりから、たちの悪い冗談の的にされていたときと同じような、10
打算的で、冷静な気持だった。ジュリヤンは身上話を長々と続け、ヴェリエールを離れてからの、みじめな生活の話をした。レーナル夫人は思った。《そうすると、あたしのほうは忘れかけていたのに、このひ

とは、一年も会わないし、思い出のしるしとなるものは、ほとんどな
に一つないのに、ヴェルギーで過した楽しい日々のことしか考えてい 15
なかったのだわ》夫人はますます啜り泣いた。ジュリヤンは自分の話
が効果をあげたと見て、いよいよきめてを打つべきときがきたと思っ
た。彼はいきなり、つい二日ばかり前にパリから受け取った手紙の話
をもち出した。

「司教祝下にお暇乞いをしてきたんです」 20

「まあ、ブザンソンへお帰りになるのじゃありませんの！ これっき
り離れて行っておしまいになるの？」

「ええ、そうです」と、ジュリヤンはきっぱり答えた。「わたしがこれ
までにいちばん愛していたひとにさえ忘れられたんですもの。もうこ
の土地もおさらばです。出ていったら二度と戻りません。パリへ行き 25
ます……」

「パリへ行くんですって！」と、レーナル夫人はつい大きな声をたて
てしまった。

夫人の声は涙にむせ、はげしい心のもだえをさらけ出している。こ
ういう姿を見なくては、ジュリヤンには勇気が出なかった。のるかそ 30
るか、場合によってはぶちこわしになりかねない行動に出ようとい
うところだったからである。それに、この嘆声を聞くまでは、見当もつ
かず、自分の言葉のききめがあったのかどうかもまったくわからな
かった。もう躊躇しなかった。後悔したくないと思う気持から、完全に
自分を抑えることができた。立ち上がりながら、冷やかにつけ加えて 35
いった。

「そうです、奥さん、これっきり、あなたともお別れです。どうかお
しあわせで。さようなら」

ジュリヤンは、二、三步窓のほうへ行き、早くも窓を開けかけた。
レーナル夫人が駆け寄って、彼の腕に飛びこんだ。 40

こうして三時間話し合ったすえ、ジュリヤンは最初の二時間のあい
だ求めに求めていたものを手にいれた。もう少し早く、レーナル夫人

の心に愛情が立ちもどり、良心の呵責がなくなっていたら、またとな
い幸福が味わえたら。このように技巧を弄して手にいれたのでは、
単なる快樂にすぎなかった。ジュリヤンは、夫人がいくら哀願しても、45
豆ランプをつけるといってきかなかった。

「じゃ、あなたの顔を見たという思い出が、なに一つ残らなくてもい
い、というんですか？ あなたのかわいい眼は、きっと恋にうるんで
いるはずだ、それも見せてもらえないんですね。このきれいな白い手
も見られないんですね？ ほくはおそらくずっとお会いできないんで 50
すよ」

そういわれてみれば、涙にかきくれるばかりで、レーナル夫人とし
ても、なに一つ拒みようがなかった。だが、暁の光に、ヴェリエール
の東に見える山の、樅の木の輪郭がくっきり描きだされはじめた。出
ていくどころか、快樂に酔いしれたジュリヤンは、この部屋に一日じ 55
ゆう隠れて過し、夜になってから発ちたいといった。

「かまわないわ。またこんなことになってしまったんですもの。もう
自分でも、自分にあきれてしまったの。これで一生不幸な目を見るこ
とになるわ」そういつて、夫人はジュリヤンをひしと胸にかき抱いた。
「主人も昔とは違うの、疑い深くなって。あのことで、あたしからうま 60
くごまかされたと思ってるの。だから、とてもあたしにつらく当るの
よ。あのひとがちょっとでも物音を聞きつけたら、あたしはおしまい
だわ。とんでもない女だってわけで、追い出されてしまうわ、たしか
にそうにはちがいないけど」

「そりゃシェランさんのいいぐさだ。ほくがつらい思いをして神学校 65
に行くまでは、そんなふうにはおっしゃらなかったはずだ。あゝころ
はほくを愛してしてくれたのに」

I 『読み解く』第7章の概念装置

われわれ読者が有する主題把握能力は高い。どのような長さの文章であれ、

われわれはそのテーマを素早く掴み取ってしまうのが通例である。そして、小さな主題がいくつか集まって一つの中間的なまとまりを形成し、さらに、その中間的なまとまりがいくつか連なって小説全体の主題を構成すると見なすことは、極めて妥当な一つの文章観だと言ってよい。

このような分析を行う際、多くの場合にわれわれが拠り所とするのは、2分法の考え方である。この2分法は、ほとんど無制限に繰り返すことができる。われわれは、そうすることによって、文章全体の内容を余すところなく把握することを目論む。これが文章理解の1つの効果的な方法だということは、疑いを容れない。

しかしながら、このような2分法による分析のみで所与の断章の構造を明らかにしようとするには、限界もある。なぜなら、2分法に基づく構造分析は、対峙する2つの部分が連続するという前提、および、叙述が必ず前から後へと一方向に進んでいくという前提に依拠しているからである。つまり、3分法などに基づく構造分析や、回帰法に基づく構造分析もまた可能だということである。

『読み解く』第7章では、これらの3分法と回帰法の有効性を確認した。すなわち、第1部分の「ジュリヤンとロザリの不倫の事実」、第2部分の「その不倫の来歴」、そして、第3部分の「ロザリの嬰兒がその不倫の結実だという事実」からなる3分構造、また、断章全体が「沈黙」に始まり「沈黙」に終わっているという回帰構造を明らかにした。

もっとも、断章凝視が、以上の3つの考え方に限定されるわけのものではないだろう。たとえば、われわれは日常生活を7つの曜日に基づいて送っているのだが、これなどは、われわれの思考が7分法によってもまたなされ得ることの証である。あるいは、5日の平日が思念の対象となるときは、われわれは5分法に基づいて考えを進めていく。

また、2つ以上の文章箇所が反復を成しているケースも考えられる。この反復法は、すでに触れた回帰法にも認められる要素であるが、連続する部分どうしにおいても、当然のことながら生起し得る現象である。

小説文を構成する大小のブロックどうしの関係は、以上のようなさまざまな

思考法を孕んだ複合的なものである。したがって、多少なりとも注意深く小説文を読んでいこうとすると、読みのプロセス自体も、幾重にも重なり合った階層を内部に含んだものにならざるを得ない。

一方、紙幅に眼を転ずると、その用いられ方によって、文章のタイプは次の3つに分類される。

- 1 紙幅を主題どうしのあいだで均等にバランスよく用いる文章。
- 2 紙幅を主題から主題に移るにつれて漸増的または漸減的に用いる文章。
- 3 紙幅を主題どうしのあいだで不均等に用いる文章。

均等型の文章の在り方は、紙幅の量と情報の重要性とを正比例させようとする傾向を映し出すものであって、秩序正しさを尊ぶ美学や世界観に対応する。漸増型もしくは漸減型の文章は、紙幅の量が規則正しく変動するにも関わらず、情報の重要性を一定に保とうとする姿勢を反映し、秩序正しさを一方で求めつつも、躍動感の静まりや高まりをも同時に欲する美学や世界観に対応する。最後の不均等型の文章の在り方は、紙幅の量と情報の重要性を逆転させようとする傾向を表し、もっぱらドラマチックな事の成り行きを追求する世界観に対応する。

小説文を読むわれわれは、紙幅というファクターの揺れとそこから醸し出される効果を、いわば肌で感じ取りながらストーリーを読み進めていく。

II テクストの分析

本断章は、40行目の「レーナル夫人が駆け寄って、彼の腕に飛びこんだ」までの箇所と、その後の箇所とに2分される。

前者は、「一個の冷静な策略家」（8行目）になったジュリヤンが、夫人との交情を成し遂げるために採った手段を詳しく述べている。『赤と黒』全編のなかでも印象的なシーンである。ジュリヤンは、身の上話を夫人に語って、彼女の同情心を掻き立てたうえで、パリに赴くことを持ち出す。そして、驚く夫人に「どうかおしあわせで。さようなら」（37～38行目）とさり気なく言葉をかける。その言葉を聞いて、恋心が再燃したレーナル夫人は「駆け寄って、彼の

腕に飛びこんだ」（40行目）わけである。夫人は、ジュリヤンが演じた愁嘆にはたして絡め取られてしまった。

後半の冒頭（41～45行目）には、闖入者としての語り手の批評が布置されている。

こうして三時間話し合ったすえ、ジュリヤンは最初の二時間のあいだ求めに求めていたものを手にいれた。もう少し早く、レーナル夫人の心に愛情が立ちもどり、良心の呵責がなくなっていたら、またとない幸福が味わえたろう。このように技巧を弄して手にいれたのでは、単なる快楽にすぎなかった。

これを受ける恰好で、縋りを戻した2人の遣り取りが描き出されている。この第2場面は、話法、特に直接話法が多用されているという特徴がある。2人の関係がふたたび元に戻ったことが、直接話法の多用によって鮮明に喚起されている。

第1場面はさらに、16行目の「……夫人はますます啜り泣いた」までの部分と、その後の部分とに2分割され得る。前者は「策略をしかけるジュリヤン」を主題とし、後者は「決め手を打つジュリヤン」を主題としている。この内の後者は、2人の遣り取りが、直接話法を用いて詳細に描出されている。

第2場面は、56行目の「……夜になってから発ちたいといった」までの部分とその後の部分とに2分割することができる。前者は「ジュリヤンの要求に涙ながらに応じるレーナル夫人」を、後者は「ジュリヤンにすっかり心を許したレーナル夫人」を主題としている。ジュリヤンが「この部屋に一日じゅう隠れて過し、夜になってから発ちたいといった」のに対する、夫人の「かまわないわ」以下の返答からは、夫人がジュリヤンへの愛情にいまは完全に身を委ねていることが窺い知れる。

このように2分法によって所与の言説を分割していき、それぞれの箇所の主眼と内容を吟味していくことの効用は、そうすることで言説の意味をふんだんに掴み取れることにある。

＊

2分法による本断章の分析によって得られた第2部分の冒頭で、語り手が闖

入している箇所があることをわれわれは見た。すでに掲げた部分なので、繰り返して引用することは差し控えるが、ここの独立性を重要視するならば、本テキストは3分法的構造を呈するものと認識することができる。つまり、ここはこれで3部構成のうちの第2部分だと見なすわけである。

一体に、『赤と黒』のナレーターはコメントを差し挟むのを好む人格である。この第2部分以外にも、8～9行目には、「ジュリヤンは情けないことに、一個の冷静な策略家になってしまった」との語り手のコメントがある。そういう語り手の性向がまとまって表れ出ているので、41～45行目の箇所は、3部構成のうちの第2部分だと見なされ得る。

ところで、語り手のこのような闖入は、読む人によっては煩いものだと思うられるかもしれない。しかし一方、それがあるからこそストーリーの大局的な展開が明瞭になるとも言える。また、語り手は、そうすることによって、われわれ読者を自らのストーリー展開に惹き込もうとしているとも見なすことができる。その結果、われわれの登場人物との同化は逆説的により緊密なものとなる。紙芝居のナレーション部分と通底するとも言えるだろう。

一方、回帰構造については、57行目の「かまわないわ。またこんなことになってしまったんですもの」というレーナル夫人の言葉に、その示唆が含まれている。「また」は、ジュリヤンがブザンソンの神学校に行く前の2人の愛情関係を指呼している。夫人が自らに課した貞操の誓いを超えたことによって、愛情関係が2人のあいだでふたたび結ばれたことを喚起している。

実は、この回帰構造は『赤と黒』全編の終結箇所にも認められる。ジュリヤンが出世の階梯をまさに上り詰めようとしている間際に、彼の目論見は破綻する。けれども、そうした野心を超越して、ジュリヤンは、レーナル夫人との愛情関係が何にも増して貴重なものなのだと深く銘記する。その間の事情は、夫人の場合にも同断である。

見られるように、『赤と黒』全編は、主人公が一夫人との恋愛関係に2度立ち戻るという構造を基に展開している。この小説は、回帰法による構造分析の重要性が際立つ作品である。

最後に、反復構造は、交情が果てたのちにジュリヤンがレーナル夫人に対し

て行う2つの要求に認められる。まず、45～53行目にはこうある。

ジュリヤンは、夫人がいくら哀願しても、豆ランプをつけるといってきかなかった。

「じゃ、あなたの顔を見たという思い出が、なに一つ残らなくてもいい、というんですか？ あなたのかわいい眼は、きっと恋にうるんでいるはずだ、それも見せてもらえないんですね。このきれいな白い手も見られないんですね？ ほくはおそらくずっとお会いできないんですよ」

そういわれてみれば、涙にかきくれるばかりで、レーナル夫人としても、なに一つ拒みようがなかった。

さらに、「出ていくどころか、快楽に酔いしれたジュリヤンは、この部屋に一日じゅう隠れて過し、夜になってから発ちたいといった」（54～56行目）とある。この要求にもレーナル夫人は譲歩する。

「かまわないわ。またこんなことになってしまったんですもの。もう自分でも、自分にあきれてしまったの。これで一生不幸な目を見ることになるわ」そういつて、夫人はジュリヤンをひしと胸にかき抱いた。

（57～59行目）

ジュリヤンの2つの要求をレーナル夫人が拒み切れないという図である。反復は強調効果をもたらすものだが、ここの例もそうである。どちらか一方が欠けても、読者が受けるインパクトが損われてしまうことは明らかである。語り手の計算は、それほどまでに緻密に行われていると言うべきであろう。

＊

小説文での紙幅の用いられ方には、「均等型」「漸増型」「漸減型」「不均等型」の4つがあることを、われわれは前節で指摘した。そして、それぞれは、秩序正しさを尊ぶ美学、躍動感の静まりを欲する美学、その高まりを欲する美学、ドラマチックな事の成り行きを追求する美学に対応するとも述べた。

ここでは、以上のことを、本断章から1例ずつ取り上げながら確認していくことにしよう。

まず「均等型」については、2分法のところですでにその例を挙げた。40行目の「レーナル夫人が駆け寄って、彼の腕に飛びこんだ」までの箇所では、ジュ

リヤンが愁嘆を演じていたのに対して、それより後の箇所では、縊りを戻した2人の遣り取りが描き出されている。これらの2つのテーマが、大まかに言って均等な紙幅を用いることによって展開されている。そこから感じ取られる美感は、けだしほど良いバランスのそれである。

「漸増型」については、事後のレーナル夫人の態度に1例が認められる。52～53行目には「そういわれてみれば、涙にかきくれるばかりで、レーナル夫人としても、なに一つ拒みようがなかった」とある。ここには夫人の嘆きが端的に述べられている。それに対して、夜明け後の夫人は冷静さをほとんど取り戻している。

「かまわないわ。またこんなことになってしまったんですもの。もう自分でも、自分にあきれてしまったの。これで一生不幸な目を見ることになるわ」そういつて、夫人はジュリヤンをひしと胸にかき抱いた。「主人も昔とは違うの、疑い深くなって。あのことで、あたしからうまくごまかされたと思ってるの。だから、とてもあたしにつらく当るのよ。あのひとがちょっとでも物音を聞きつけたら、あたしはおしまいだわ。とんでもない女だってわけで、追い出されてしまうわ、たしかにそうにはちがいないけど」

(57～64行目)

紙幅が漸増的に用いられるのに対応して、躍動感が静まってきているのが如実に感じ取られる。言い換えれば、紙幅のこの変動は、レーナル夫人のそのような心理的变化を鮮明に反映している。

次に「漸減型」については、21～22行目の「まあ、ブザンソンへお帰りになるのじゃありませんの！ これっきり離れて行っておしまいになるの？」というレーナル夫人の言葉と、27行目の「パリへ行くんですって！」という同じく夫人の言葉とのあいだに、その1例が認められる。ここにおいて「漸減型」に伴う躍動感の高まりが、はっきりと見て取れる。特に、後者には「レーナル夫人はつい大きな声をたててしまった」との発話様態を示す言辞が添えられているので、2者のあいだの懸隔はさらに大きくなっている。

最後に「不均等型」に関しては、39～40行において、紙幅のドラマチックな

使用例が認められる。いわく、「ジュリヤンは、二、三步窓のほうへ行き、早くも窓を開けかけた。レーナル夫人が駆け寄って、彼の腕に飛びこんだ」とある。この2文の短さは、ここまで「一個の冷静な策略家」（8行目）としてのジュリヤンの語りが縷々続いていたことと対照を成している。ベッドあるいはソファのうえでのジュリヤンの口説きが、38行に亘って続いていたのとのコントラストである。あるいは、2人の話し合いが座ってのものだったのに対して、「窓を開けるジュリヤン」「ジュリヤンの胸に飛びこむレーナル夫人」が、動的な性質を強く帯びている対照でもある。このような結構が読者に与えるインパクトには多大なものがある。

Ⅲ まとめ

5分構造や7分構造こそ別決できなかったものの、2分法・3分法・回帰法・反復法が、本断章の分析においても有効であることが確認され得た。これらの構造が本テキストに見事に組み込まれているのを明らかにすることができた。

それは、紙幅の使われ方についても等しく言える。本断章は、紙幅の4つの類型がしなやかに結びついて成立している。われわれ読者は、意識するとしないうちに問わず、この4つのタイプのあいだの揺れに身を任せて、その妙味を味わえば体感する。

けれども、以上のことは、むしろ言説の「スペース」に着目しての分析結果である。ところが、小説文の読者は、特に初読の際には、このような大局的な視座を必ずしも持ち合わせていない。初読者は小説文の流れに身を委ねて、そこに生起する驚きを喫していくものだろう。いわば、小説文という言説の「ストリーム」を辿りながら、登場人物たちの喜怒哀楽を分かち合う。小説文のこのストリーム性は、本稿第14章でまとめて取り上げることにしよう。

——第7章おわり——

主要参考文献

- Bourneuf (Roland) et Ouellet (Réal): *L'univers du roman*, PUF, 1975.
- Fontanier (Pierre): *Les figures du discours*, Flammarion, 1977.
- Genette (Gérard): *Figures* III, Seuil, 1972.
- Lodge (David): *The Art of Fiction*, Penguin Books, 1992.
- Stalloni (Yves): *Dictionnaire du roman*, Armand Colin, 2006.
- 野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年。
- 野内良三『レトリックと認識』、日本放送出版会、2000年。
- 吉田廣「二つの『石榴』——日仏詩文の比較対照的分析の一例——」、大阪経済法科大学論集第55号、1994年。
- 吉田廣『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』、大阪経済法科大学出版部、2008年。
- 吉田廣「小説文の統合性——『雁』をめぐる——」、大阪経済法科大学論集第98号、2009年。
- 吉田廣『『赤と黒』の構造（一）』、大阪経済法科大学論集第101号、2011年。